

子どもへの不適切な関わりに対する保健師の認識（報告）

著者	三輪 眞知子, 岩清水 伴美, 鈴木 ふみえ, 山屋 春恵
雑誌名	滋賀医科大学看護学ジャーナル
巻	2
号	1
ページ	53-62
発行年	2004-02-15
その他の言語のタイトル	Perception of maltreatment of child among public health nurses
URL	http://hdl.handle.net/10422/897

報告

子どもへの不適切な関わりに対する保健師の認識

Perception of Maltreatment of Child among Public Health Nurses

三輪真知子^{*1} Machiko Miwa, 岩清水伴美^{*2} Tomomi Iwashimizu,
鈴木ふみえ^{*3} Fumie Suzuki, 山屋 春恵^{*2} Harue Yamaya

Abstract An investigation using a Likert type questionnaire consisting of 39 question items was carried out in 80 public health nurses at Health and Welfare Center and health centers of local governments in A Prefecture in October and November, 2001 to evaluate the understanding and attitude of public health nurses, who are responsible for the protection of children from abuse, with regard to their 1) perception and 2) reporting of child abuse.

Responses were obtained from 79 public health nurses (response rate 98.8%), and the following points were revealed. The public health nurses surveyed in this study tended 1) to perceive child abuse when the risk of children's lives or effects on their psychology were evident, but 2) not to perceive it when the effects on the children's bodies and minds were not evident. Also, 3) the public health nurses respected the viewpoints of parents rather than children in judging whether child abuse had occurred. In addition, 4) concerning reporting of child abuse, the public health nurses hesitated to report the abuse when they judged it to be "discipline", and might not report it even if they perceived the child to have been abused.

The results of this study may provide important clues for establishing of systems for early detection of, and intervention in child abuse. However, as the subjects were limited to public health nurses at health and welfare centers, the validity of the results of this study must still be examined in a wider range of health professionals.

抄 録 本研究では子どもの虐待を予防する責務がある保健師の、子どもへの不適切な関わりに対する認識の度合いについて、1)その行為が子どもへの不適切な関わりであるかどうか、2)子どもへの不適切な関わりに対する連絡・通告、の2点の観点から明らかにするために、A県健康福祉センター・市町村保健センターに所属する80名の保健師を対象に、39項目から構成されたりカートタイプ質問紙を用いて、2001年10月から11月の間に調査を実施した。

79名から回答が得られ(回収率98.8%)、以下の諸点が明らかになった。本調査の対象となった保健師たちは、1)生命の危機や児の心的影響が明らかなる場合、「子どもへの不適切な関わり」という認識が高く、2)児の心身への影響が表面に表れない行為については「子どもへの不適切な関わり」という認

*1 滋賀医科大学看護学科, Shiga University of Medical Science, 連絡先: 〒520 2192 滋賀県大津市瀬田月輪町
Tel: 077 548 2465, E-mail: miwama@belle.shiga-med.ac.jp

*2 静岡県心と体の相談センター, Shizuoka Counseling Center for the Mentally and Physically Disabled

*3 静岡県西部健康福祉センター, Shizuoka Western Health and Welfare Center

受付: 2003年9月25日, 受理: 2003年12月8日

識が低い。また、3)その行為が「子どもへの不適切な関わり」であるかどうか判断する場合には親の立場を優先し、子どもの立場には立っていない。そして、4)子どもへの不適切な関わりに対する連絡・通告」に関しては、その行為を「しつけ」と判断した場合には通告することに抵抗感や迷いがあり、「子どもへの不適切な関わり」であるという認識があっても連絡・通告しないこともある。

本研究の結果は子どもへの不適切な関わりの行為を早期に発見し援助していくシステムを構築していくうえで、重要な手がかりになると思われるが、調査の対象がA県の一部の関連センターの保健師に限定されているので、今後対象者の範囲を広げて本研究の結果を検証していく必要がある。

キーワード Child Maltreatment, Public Health Nurse, Prevention of Child Abuse

子どもへの不適切な関わり, 保健師, 子ども虐待予防

はじめに

子どもの虐待は児の生命が奪われる事もあり、母子保健における最優先課題である。保健師の役割は、子ども虐待に至る前に、育児の困難さに気づき家族全体をとらえ直し、家族の負担を取り除く支援をすることである。地域に密着した母子保健を行う保健師には、多くの親子と出会う乳幼児健康診査等の場において虐待ハイリスクの親子を把握すること、家庭訪問で親が受け入れやすい方法を駆使して親を受容し、育児負担の軽減を図る調整を行うこと、医療機関等関係機関と連携して子ども虐待を予防することが求められる(佐藤, 2002)。保健師は子ども虐待が起こる前に予防するために、通常の母子保健活動の中で、子ども虐待ハイリスクの親子を把握しアセスメントしなければならない。児の生命が奪われるのを防ぐために、親子の心身の状況の把握、危機の見極め、親子分離に確実につなげる判断、各関係機関との調整が求められる。

育児の困難さに早期に気づき予防する支援、ハイリスクの親子の把握や支援は、保健師が子ども虐待をどのように認識しているかにより異なってくるので、子ども虐待に対する保健師の認識を把握することが、子ども虐待予防、早期発見や児の生命が奪われることを防止する支援強化になると思われる。

高橋, 庄司, 中谷, 澁谷, 栃尾と北村(1995)は児童相談所の児童福祉士(相談員)と心理職を対象に、子どもへの不適切な関わりをアセスメントする基準

とその対応について試案を提示するためにビネット調査(Vignettes study)を実施している。その結果、ビネット調査を土台にした指標を作成することで、「不適切な関わり」にあたるのか、「通常のしつけとして許容される範囲」なのかを客観的に意思決定できることが明らかになっている。

本研究は子どもの虐待を予防する責務がある保健師自身の子どもへの不適切な関わりに関する認識について、高橋らが実施したビネット調査を行い、子ども虐待予防をする援助者としての保健師に関する認識の課題を明らかにした。

研究の背景

「子ども虐待」から「子どもへの不適切な関わり」への概念の拡大

高橋, 庄司, 千賀, 須永, 益満, 加藤, 木村と栃尾(1994)は「子ども虐待」という言葉は身体的虐待に代表されるような、肉体的なダメージを伴う重傷のケースをイメージさせ、1)ネグレクト等養育に関する知識不足や無関心による子どもへの被害の拡大をさせ、2)親等に大きな抵抗を引き起こし、結果的に治療的関わりが難渋する、という問題点を指摘した。高橋ら(1995)は日本の子どもへの虐待の主要な定義、アメリカ(マサチューセッツ州、カリフォルニア州)カナダ(オンタリオ州)の定義と根拠法を検討して「おとなの子どもへの『不適切な関わり』(maltreatment)」(以下「子どもへの不適切な関わり」と略

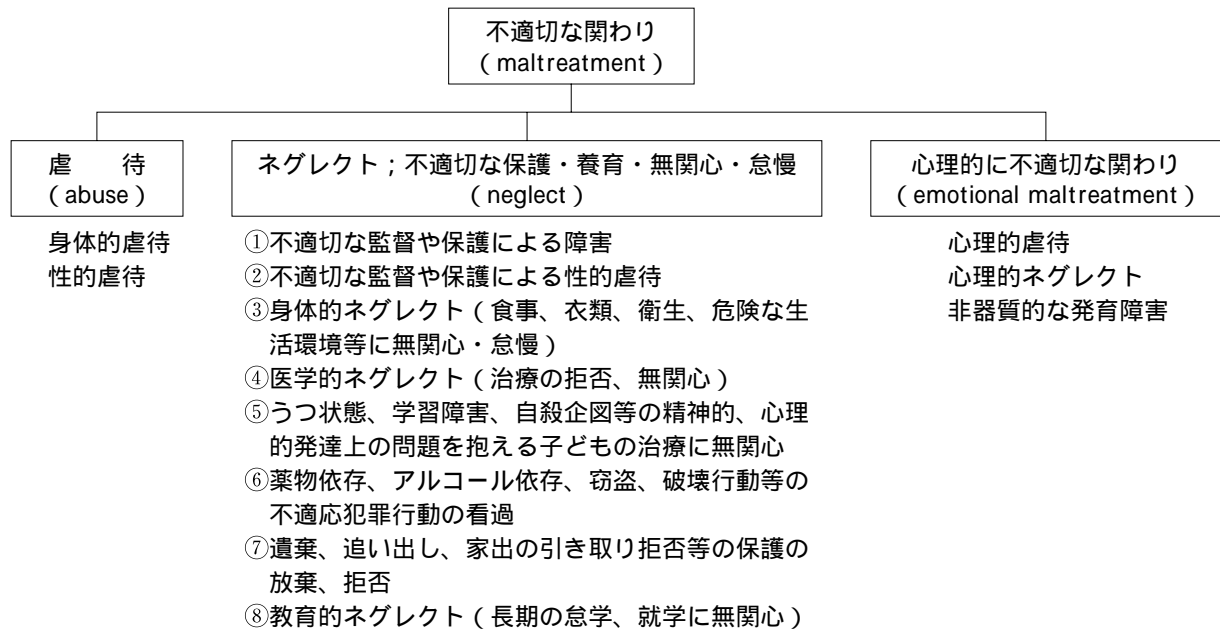


図1 おとなの子どもへの「不適切な関わり」の概念フレームワーク

出典：日本総合研究所プロジェクト研究27試案

す）概念フレームワークをまとめた（図1）。

「しつけ」と「子どもへの不適切な関わり」の判断

ケンプの虐待発生連続性について、松井と谷村（1999）は親の養育行動の中で「たたく」行為の連続変化を「たたく」「ひどく叩く」「つき倒す」「投げ飛ばす」「過度の暴行」と説明し、初期の段階ではたとえ「しつけ」の範囲内であっても「たたく」は容易に加速する、しつけともとれる段階での介入が可能であれば、予防は可能であると述べている。一方、ネグレクトの場合は親の常識的な配慮の不足、判断の甘さや誤り、子どもを配慮する心身のゆとり不足などが原因であることが多い。このため、「子どもへの不適切な関わり」に対する認識は親の立場が優先して子どもの状況を最優先できにくい場面も多くあり、親の養育方針に他者が介入することへの迷いも生じる。坂井（1998）は「アブユース」と「ネグレクト」の本質は加害者の意思にあるのではなく、子どもが安全でない、危険な状態にあるという認識にあることは重要な点であると述べている。また、子どもへの虐待の認知の目的は、加害者を告発したり、罰したりすることにあるのではなく、再

び子ども虐待が発生しないために、母親や家族への援助活動を始めるきっかけであると述べている。保健師は子どもへの不適切な関わりへの認識や支援の必要性を判断する時は、親の状態や意思ではなく、子どもの命の安全、心身の安楽の確保を最も重視することが必要である。

子どもの人権擁護に対する認識

子ども権利条約は1989年11月20日国際連合の総会で採択され、保護対象としての子どもから、権利主体としての子どもへと子ども観を転換している（喜多，2000）。高橋，石森，岩田，影山，加藤，悴田ら（2000）は大人には何が子どもにとって最善の利益なのかを判断することは決して容易ではなく、子どもの権利侵害は、しつけ、教育的配慮などの名目で、大人の善意で押し付けられものが多い、できるだけ子どもの意見を聴き、その意見を尊重しながらすすめるべきと述べている。地域における母子保健の最前線にいる保健師として子ども権利条約を踏まえ、子どもの意見や言葉を聴くことができる訓練をしていく必要がある。

研究方法

本研究はピネット調査法を用いた調査研究であり、データはピネット調査を用いて収集した。

ピネット調査は、短いストーリーを提示して回答を求め、回答者の考え方を把握解析する調査法であり、「子どもへの不適切な関わり」に該当する想定事例文(ピネット39項目)(高橋,他,1995)を用いた。想定事例文は、もともと40項目作成されていたが、回答しにくい事例設定が1項目あったため39項目を分析対象にしており(高橋,他,1995)、今回はその39項目を用いた。調査票は「子どもへの不適切な関わり」に該当する想定事例文39項目を挙げ、選択肢から自己に当てはまるものを選んで回答してもらった。本調査票のピネットはすべて、「子どもへの不適切な関わり」への取り組みが進んでいる諸外国では「アビューズ」「ネグレクト」とみなしている行為であるが、本研究ではピネット調査を用いたので「アビューズ」あるいは「ネグレクト」ではなく、「子どもへの不適切な関わり」の認識とした。ピネットの使用については高橋の許可を得て用いた。

用語の操作定義

本調査では「子どもへの不適切なかわり」に子ども虐待の一般的な分類である「身体的虐待」「心理的虐待」「ネグレクト」「性的虐待」を含めた。

これらの用語の定義は、児童虐待防止等に関する法律(厚生省,2001)に基づき、また、「子どもへの不適切な関わり」は高橋ら(1995)の定義に従った。

4分類の定義:1)身体的虐待(生命・健康に危険のある身体的な暴行等)2)性的虐待:性交、性的暴行、性的行為の強要、3)ネグレクト:保護の怠慢や拒否により健康状態や安全を損なう行為、4)心理的虐待:暴言や差別など心理的外傷を与える行為。

「子どもへの不適切な関わり」の定義:1)18歳未満の子どもに対する、2)おとな、あるいは行為の適否に関する判断の可能な年齢の子ども(およそ15歳未満)による、3)身体的暴力、不当な扱い、明らかに不適切な養育、事故防止への配慮の欠如、ことばに

よる脅かし、性的行為の強要などによって、4)明らかに危険が予想されたり、子どもが苦痛を受けたり、明らかな心身の問題が生じているような状態。

児童虐待防止等に関する法律では「児童の身体外傷が生じ又は生じる恐れのある暴行があること」と規定し、子どもへの不適切な関わりでは「明らかに危険が予想されたり、子どもが苦痛を受けたり...」と述べている。子どもへの不適切な関わりでは、子どもの側にとって有害な行為としている。

調査対象者

A県A健康福祉センター及び市町村保健センター保健師(以下保健師と略す)80名。A健康福祉センターは管内市町村と共に、母子保健において子ども虐待予防を重点事業として取り組んでいる。保健師は子ども虐待の判断ができにくいことを問題にしていたこと、保健師の調査への意志があったことからサンプリングとした。

調査期間

2001年10月～11月。

調査方法

A健康福祉センター保健師が管内保健師に職場毎に調査の主旨等の説明を行ったうえで、自記式調査用紙を配布した。記入後の調査用紙は、職場毎にまとめて研究者宛直接郵送で返送した。

調査内容

調査用紙には、調査対象者の所属機関、年齢、性別、勤務年数を問うフェースシートの他に、子どもへの不適切な関わりの認識について問うために、39ピネット項目について、「左記の行為は虐待や放任だと思いますか」という問を設け、「全く問題ない」「あまり問題ない」「虐待や放任ではないが不適切だ」「虐待または放任の疑いがある」「虐待または放任である」「わからない」の6段階からなるリカートタイプ質問紙を構成し、回答を求めた。また、子どもへの不適切な関わりに対する連絡と通報に関して

は、「児童福祉現業機関に連絡や通告をする必要があると思いますか」という問を設け、「明らかに必要ない」「多分必要ない」「どちらとも言えない」「多分必要ある」「明らかに必要ある」の5段階からなるリカートタイプ質問紙を構成し、回答を求めた。

データ分析方法

本研究では39項目の行為に対する保健師の認識の度合いについて明らかにするために、データはSPSS ver.9 を用いて、各項目について段階毎に回答者の比率をみた。

倫理的配慮

倫理的配慮として、調査の主旨、結果は統計的処理をするため個人の情報は明らかにならないこと、調査結果は研究目的以外には用いないこと、調査協力は本人の自由意思であることを調査前に説明すると共に依頼文書を添付した。また、回収は各自封筒に封をしてもらい郵送にて回収することで、プライバシー保護に配慮した。

結 果

80名中79名から回答が得られた（回収率98.8%）。

回答者の属性

回答者は全員女性であり、20歳代22名（27.8%）、30歳代30名（38.0%）、40歳代19名（24.1%）、50歳代8名（10.1%）であった。勤務年数は5年未満が17名（21.5%）、5～9年が19名（24.5%）、10～14年が10名（12.7%）、15～19年が14名（17.7%）、20年以上が19名（24.0%）であった。所属機関は市町村67名（84.8%）、保健所12名（15.2%）であった。

子どもへの不適切な関わりに対する認識

「左記の行為は虐待や放任だと思いますか」に関して、90%以上の者が「虐待・放任」と回答した項目は11項目あり、そのうち、性的虐待4項目、身体的虐待、ネグレクトが各3項目、心理的虐待1項目

であった（表1）。「虐待または放任の疑いがある」または「虐待または放任である」と回答した者の割合が高かった項目は、「子どもにタバコを押し付ける」「子どもの腹を足で蹴る」等生命に危険を及ぼしたり、外傷を伴う行為、「親が思春期の娘の胸を愛撫する」「親が子どもの性器を愛撫する」等性的虐待に関するものであった。また、「『殺してやる』と真剣な表情で包丁を子どもに突きつける」と言った心理的虐待や「親が子どもの世話を嫌がり、ミルクを与える回数が減る」のネグレクトの項目であった。

「虐待・放任」の回答の少なかった項目について虐待の種類別にみると、ネグレクトでは「子どもの高熱を座薬によって下げて翌朝保育園につれていく」15名（19.0%）、「親の帰りが遅いため子どもはいつも夕食を1人で食べる」24名（30.4%）、「夜、子どもを寝かしつけてから夫婦で遊びに出かける」35名（44.3%）であった。身体的虐待では「罰として子どもに長時間正座をさせる」32名（40.5%）、「親が子どもを叩いたがけがやあざは生じなかった」58名（74.5%）、「親が子どもを叩いたらあざができた」58名（74.5%）であった。心理的虐待では「子どもが嫌がるのに年齢不相応な早期教育を強要する」16名（20.3%）、「罰として子どもが大事にしているおもちゃを捨てる」19名（24.0%）、「太っているのを気にしている子に親が『お前はいつみてもデブだね。』という」29名（36.7%）であった。性的虐待では「親が思春期の子どもと一緒に風呂に入る」24名（30.4%）、「親が自分の好みで娘に露出度の高い服を着せる」34名（43.0%）、「親が性交の様子等も含めて自分の異性体験について子どもに話す」38名（48.1%）であった。

子どもへの不適切な関わりに対する連絡・通告の認識

「児童福祉の現業機関に連絡や通告をする必要があると思いますか」に関して、90%以上の方が「必要ある」と回答した項目は8項目あり、そのうち、性的虐待4項目、身体的虐待、ネグレクト3項目、心理的虐待1項目であった（表2）。上位にあがっている項目は「『殺してやる』と真剣な表情で包丁を子どもに突きつける」79名（100%）、「親が子どもの性

表1. 子どもへの不適切な関わりに対する認識 (N: 79)

ビ ネ ッ ト 項 目		全 全 問題ない n (%)	あ ま り 問題ない n (%)	虐待や放任 ではないが 不適切だ n (%)	虐待または 放任の疑い がある n (%)	虐待または 放任である n (%)	わからない n (%)	無 回 答 n (%)	虐待・放任 n (%)
p	A14 子どもにタバコを押し付ける				2 (2.5)	7 (9.5)			7 (10.0)
e	A29 「殺してやる」と真剣な表情で包丁を子どもに突きつける			1 (1.3)	4 (5.1)	7 (9.3)			7 (9.7)
s	A24 親が思春期の娘の胸を愛撫する				11 (13.9)	6 (8.4)		1 (1.3)	7 (9.7)
p	A7 子どもの腹を足で蹴る			2 (2.5)	21 (26.6)	5 (7.0)			7 (9.5)
s	A33 親が子どもの性器を愛撫する		1 (1.3)	1 (1.3)	9 (11.4)	6 (8.6)			7 (9.5)
n	A34 親が子どもの世話を嫌がりミルクを与える回数が減る			2 (2.5)	19 (24.1)	5 (7.3)			7 (9.5)
n	A38 親がカラオケなどで遊んでいて家に帰らず食事を作らない			2 (2.5)	19 (24.1)	5 (7.3)			7 (9.5)
s	A10 親の性的満足のために自分の性器を子どもに触らせる			1 (1.3)	5 (6.3)	7 (9.1)		1 (1.3)	7 (9.5)
p	A30 親が酒に酔うと子どもを叩いてる			4 (5.1)	19 (24.1)	5 (7.0)			7 (9.5)
n	A37 子どもの慢性疾患があり、生命に危険があるのに病院に連れていかない		1 (1.3)	2 (2.5)	12 (15.2)	6 (7.8)		2 (2.5)	7 (9.3)
s	A18 親が18歳未満の子どもと性交する			6 (7.6)	3 (3.8)	6 (8.3)		1 (1.3)	7 (9.1)
p	A20 親が子どもを叩いたら医者による治療が必要な外傷が生じた			8 (10.1)	16 (20.3)	5 (6.9)			7 (8.9)
e	A28 子どもの話し掛けを一切無視して答えない			9 (11.4)	21 (26.6)	4 (6.2)			7 (8.6)
n	A1 親がパチンコをしている間乳幼児を車に残しておく			10 (12.7)	19 (24.1)	5 (6.3)			6 (8.4)
n	A13 親が洗濯しないので子どもはいつも不衛生な服をきている			11 (13.9)	26 (32.9)	4 (5.2)			6 (8.6)
p	A2 罰として子どもを夜中まで立たせておく		2 (2.5)	10 (12.7)	24 (30.4)	4 (5.4)			6 (8.4)
e	A25 子どもの「あんたなんか生まれてこなければ良かった」としばしば言う		1 (1.3)	12 (15.2)	36 (45.6)	3 (3.8)			6 (8.3)
p	A11 親が子どもを叩いたがけがやあざは生じなかった		8 (10.1)	12 (15.2)	42 (53.2)	16 (20.3)		1 (1.3)	5 (8.3)
p	A39 親が子どもを叩いたらあざができた	1 (1.3)	3 (3.8)	15 (19.0)	25 (31.6)	3 (4.1)		2 (2.5)	5 (8.3)
n	A23 子どもが精神的に不安定なのに専門的な診断や援助をうけさせない			23 (29.1)	30 (38.0)	2 (3.1)	1 (1.3)		5 (6.9)
e	A4 乳幼児が泣いても無視して抱っこしてあげない		2 (2.5)	22 (27.8)	38 (48.1)	1 (2.0)		1 (1.3)	5 (6.8)
n	A26 親がギャンブルにお金を使ったため給食費が払えない		1 (1.3)	22 (27.8)	19 (24.1)	3 (4.4)	1 (1.3)	1 (1.3)	5 (6.8)
n	A19 幼児同士が刃物で遊んでいるのに止めない		1 (1.3)	25 (31.6)	22 (27.8)	3 (3.9)			5 (6.7)
e	A21 親が言葉かけをしないので子どもの発達が遅れている			27 (34.2)	28 (35.4)	2 (3.0)			5 (6.8)
e	A31 罰として子どもの頭をツルツルに剃る		3 (3.8)	21 (26.6)	20 (25.3)	3 (4.0)		3 (3.8)	5 (6.8)
s	A40 親子が子どもにポルノビデオを見せる		1 (1.3)	26 (32.9)	15 (19.0)	3 (4.3)		3 (3.8)	4 (6.2)
n	A32 家出した子どもが帰ってきてても家に入れない		4 (5.1)	25 (31.6)	27 (34.2)	1 (2.4)	1 (1.3)	3 (3.8)	4 (6.3)
n	A9 子どもが仲間を呼んで飲酒しているのに親は何も言わない		4 (5.1)	32 (40.5)	27 (34.2)	1 (2.0)	1 (1.3)		4 (6.3)
s	A35 親が性交の様子等も含めて自分の異性体験について子どもに話す	1 (1.3)	4 (5.1)	22 (27.8)	21 (26.6)	1 (2.5)		14 (17.7)	3 (4.8)
n	A5 夜、子どもを寝かしつけてから夫婦で遊びに出かける		3 (3.8)	38 (48.1)	23 (29.1)	1 (2.5)		3 (3.8)	3 (4.4)
s	A16 親が自分の好みで娘に露出度の高い服を着せる	1 (1.3)	4 (5.1)	37 (46.8)	25 (31.6)	9 (11.4)		3 (3.8)	3 (4.3)
e	A8 他の兄弟と比べて「お前はダメだ」という		3 (3.8)	44 (55.7)	22 (27.8)	10 (12.7)			3 (4.0)
p	A22 罰として子どもに長時間正座させる	1 (1.3)	12 (15.2)	31 (39.2)	27 (34.2)	5 (6.3)		3 (3.8)	3 (4.0)
e	A15 太っているのを気にしている子に親が「お前はいつ見てもデブだね」と言う	1 (1.3)	3 (3.8)	46 (58.2)	21 (26.6)	8 (10.1)			2 (3.6)
n	A3 親の帰りが遅いため子どもはいつも夕食を1人で食べる	1 (1.3)	6 (7.6)	47 (59.5)	19 (24.1)	5 (6.3)		1 (1.3)	2 (3.4)
s	A6 親が思春期の異性の子どもと一緒に風呂に入る	2 (2.5)	16 (20.3)	32 (40.5)	17 (21.5)	7 (8.9)	1 (1.3)	4 (5.1)	2 (3.4)
e	A36 罰として子どもの大事にしていたおもちゃを捨てる	1 (1.3)	7 (8.9)	50 (63.3)	17 (21.5)	2 (2.5)		2 (2.5)	1 (2.4)
e	A12 子どもが嫌がるのに年齢不相応な早期教育を強要する	1 (1.3)	8 (10.1)	53 (67.1)	7 (8.9)	9 (11.4)		1 (1.3)	1 (2.0)
n	A27 子どもの高熱を座薬によって下げて翌朝保育所に連れていく	2 (2.5)	11 (13.9)	47 (59.5)	12 (15.2)	3 (3.8)	1 (1.3)	3 (3.8)	1 (2.0)

注1) n: ネグレクト p: 身体的虐待 e: 心理的虐待 s: 性的虐待 注2) 「虐待・放任」は「虐待または放任の疑いがある」と「虐待または放任である」の回答数の合計

表 2 . 子どもへの不適切な関わりに対する連絡・通告の認識 (N : 79)

		明らかに 必要ない n (%)	多 分 必要ない n (%)	どちらとも 言えない n (%)	多 分 必要ある n (%)	明らかに 必要ある n (%)	無 回 答 n (%)	必要ある n (%)
e	B29 「殺してやる」と真剣な表情で包丁を子どもに突きつける				13(16.5)	66(83.5)		79(100.0)
s	B33 親が子どもの性器を愛撫する			2(2.5)	23(29.1)	53(67.1)	1(1.3)	76(96.2)
n	B37 子どもの慢性疾患があり、生命に危険があるのに病院に連れていかない		1(1.3)	3(3.8)	17(21.5)	57(72.2)	1(1.3)	74(93.7)
p	B14 子どもにタバコを押し付ける			5(6.3)	12(15.2)	61(77.2)	1(1.3)	73(92.4)
s	B18 親が18歳未満の子どもと性交する		2(2.5)	3(3.8)	7(8.9)	66(83.5)	1(1.3)	73(92.4)
n	B34 親が子どもの世話を嫌がりミルクを与える回数が減る		1(1.3)	5(6.3)	36(45.6)	37(46.8)		73(92.4)
s	B10 親の性的満足のために自分の性器を子どもに触らせる		1(1.3)	5(6.3)	22(27.8)	50(63.3)	1(1.3)	72(91.1)
s	B24 親が思春期の娘の胸を愛撫する			5(6.3)	23(29.1)	49(62.0)	2(2.5)	72(91.1)
p	B30 親が酒に酔うと子どもを叩いてる		2(2.5)	6(7.6)	39(49.4)	31(39.2)	1(1.3)	70(88.6)
p	B20 親が子どもを叩いたら医者による治療が必要な外傷が生じた		3(3.8)	9(11.4)	13(16.5)	54(68.4)		69(84.9)
p	B7 子どもの腹を足で蹴る		2(2.5)	10(12.7)	32(40.5)	35(44.3)		67(84.8)
n	B38 親がカラオケなどで遊んでいて家に帰らず食事を作らない		1(1.3)	13(16.5)	26(32.9)	39(49.4)		65(82.3)
n	B1 親がパチンコをしている間乳幼児を車に残しておく		3(3.8)	14(17.7)	33(41.8)	28(35.4)	1(1.3)	61(77.2)
p	B2 罰として子どもを夜中まで立たせておく		8(10.1)	16(20.3)	29(36.7)	26(32.9)		55(69.6)
e	B28 子どもの話し掛けを一切無視して答えない		8(10.1)	18(22.8)	32(40.5)	21(26.6)		53(67.1)
n	B13 親が洗濯しないので子どもはいつも不衛生な服をきている		10(12.7)	15(19.0)	33(41.8)	19(24.1)	2(2.5)	52(65.9)
e	B21 親が言葉かけをしないので子どもの発達が遅れている		9(11.4)	16(20.3)	32(40.5)	19(24.1)	3(3.8)	51(64.6)
n	B23 子どもが精神的に不安定なのに専門的な診断や援助をうけさせない		6(7.6)	19(24.1)	32(40.5)	19(24.1)	3(3.8)	51(64.6)
p	B39 親が子どもを叩いたらあざができた	2(2.5)	8(10.1)	17(21.5)	26(32.9)	24(30.4)	2(2.5)	50(63.3)
n	B26 親がギャンブルにお金を使ったため給食費が払えない	1(1.3)	8(10.1)	21(26.6)	25(31.6)	21(26.6)	3(3.8)	46(58.2)
n	B19 幼児同士が刃物で遊んでいるのに止めない	2(2.5)	10(12.7)	25(31.6)	23(29.1)	18(22.8)	1(1.3)	41(51.9)
n	B32 家出した子どもが帰ってきてても家に入れない	3(3.8)	13(16.5)	23(29.1)	22(27.8)	16(20.3)	2(2.5)	38(48.1)
s	B40 親子が子どもにポルノビデオを見せる	3(3.8)	7(8.9)	30(38.0)	20(25.3)	18(22.8)	1(1.3)	38(48.1)
e	B4 乳幼児が泣いても無視して抱っこしてあげない	1(1.3)	13(16.5)	28(35.4)	30(38.0)	6(7.6)	1(1.3)	36(45.6)
e	B31 罰として子どもの頭をツルツルに剃る	1(1.3)	12(15.2)	30(38.0)	24(30.4)	12(15.2)		36(45.6)
p	B11 親が子どもを叩いたがけがやあざは生じなかった	1(1.3)	13(16.5)	31(39.2)	29(36.7)	4(5.1)	1(1.3)	33(41.8)
e	B25 子どもの「あんたなんか生まれてこなければ良かった」としばしば言う		9(11.4)	37(46.8)	26(32.9)	7(8.9)		33(41.8)
s	B35 親が性交の様子等も含めて自分の異性体験について子どもに話す	2(2.5)	16(20.3)	32(40.5)	20(25.3)	8(10.1)	1(1.3)	28(35.4)
n	B5 夜、子どもを寝かしつけてから夫婦で遊びに出かける	1(1.3)	17(21.5)	34(43.0)	21(26.6)	5(6.3)	1(1.3)	26(32.9)
n	B9 子どもが仲間を呼んで飲酒しているのに親は何も言わない	4(5.1)	17(21.5)	36(45.6)	17(21.5)	3(3.8)	2(2.5)	20(25.3)
s	B16 親が自分の好みで娘に露出度の高い服を着せる	6(7.6)	21(26.6)	34(43.0)	14(17.7)	3(3.8)	1(1.3)	17(21.5)
p	B22 罰として子どもに長時間正座させる	6(7.6)	19(24.1)	38(48.1)	11(13.9)	4(5.1)	1(1.3)	15(19.0)
n	B3 親の帰りが遅いため子どもはいつも夕食を1人で食べる	4(5.1)	22(27.8)	39(49.4)	12(15.2)	2(2.5)		14(17.7)
e	B8 他の兄弟と比べて「お前はダメだ」という	5(6.3)	18(22.8)	45(57.0)	10(12.7)	1(1.3)		11(14.0)
s	B6 親が思春期の異性の子どもと一緒に風呂に入る	4(5.1)	22(27.8)	42(53.2)	8(10.1)	1(1.3)	2(2.5)	9(11.4)
n	B27 子どもの高熱を座薬によって下げて翌朝保育所に連れていく	14(17.7)	28(35.4)	26(32.9)	5(6.3)	4(5.1)	2(2.5)	9(11.4)
e	B12 子どもが嫌がるのに年齢不相応な早期教育を強要する	12(15.2)	36(45.6)	23(29.1)	6(7.6)	2(2.5)		8(10.1)
e	B15 太っているのを気にしている子に親が「お前はいつ見てもデブだね」と言う	10(12.7)	29(36.7)	34(43.0)	5(6.3)	1(1.3)		6(7.6)
e	B36 罰として子どもの大事にしていたおもちゃを捨てる	15(19.0)	32(40.5)	30(38.0)	2(2.5)	0(0.0)		2(2.5)

注 1) n : ネグレクト p : 身体的虐待 e : 心理的虐待 s : 性的虐待 注 2) 「必要ある」は「多分必要ある」と「明らかに必要ある」の回答数の合計

器を愛撫する」76名(96.2%)、「子どもの慢性疾患があり、生命に危険が及ぶのに病院に連れていかない」74名(93.7%)、「子どもにタバコを押し付ける」73名(92.4%)、「親が18歳未満の子どもと性交する」73名(92.4%)の順であり、子どもの不適切な関わりの認識の割合と対応していた。

「必要ある」の回答の最も少なかった項目は「罰として、子どもの大事にしているおもちゃを捨てる」2名(2.5%)、「太っているのを気にしている子に親が『お前はいつもみてもデブだね』と言う」6名(7.6%)、「子どもが嫌がるのに年齢不相応な早期教育を強要する」8名(10.1%)ですべて心理的虐待であった。この項目を子どもへの不適切な関わりに対する認識において「虐待・放任」と回答した割合と対比してみると、各々19名(24.0%)、2名(36.7%)、16名(20.3%)で、子どもへの不適切な関わりに対する連絡・通告の認識は子どもへの不適切な関わりに対する認識より低かった。

考 察

子どもへの不適切な関わりに対する認識

ピネット39項目について子どもへの不適切な関わりの認識が高いのは「子どもにタバコを押し付ける」「殺してやる」と真剣な表情で包丁を子どもにつきける」「親が思春期の娘の胸を愛撫する」等、子どもの生命に危険がある行為、親の満足を目的とした性的行為等、子どもへの心身への影響が明らかに考えられる項目であった。

子どもへの不適切な関わりに対する認識が低い項目を虐待種類別にみると、ネグレクトでは「子どもの高熱を座薬によって下げて翌朝保育園につれていく」「親の帰りが遅いため子どもはいつも夕食を1人で食べる」で、行為の決定は親の仕事が忙しくて、子どもと一緒に時間が過ごせないことや仕事をしているので、しかたがないことであるという親側に立った判断が働いている。

身体的虐待では「罰として子どもに長時間正座をさせる」「親が子どもを叩いたがけがやあざは生じな

かった」「親が子どもを叩いたらあざができた」で、行為の決定は「しつけ」や親側の教育方針に基づいていると考えられる。また、「あざ程度であれば大丈夫」という親側に立った判断が優先している。心理的虐待では「子どもが嫌がるのに年齢不相応な早期教育を強要する」「罰として子どもが大事にしているおもちゃを捨てる」「太っているのを気にしている子に親が『お前はいつもみてもデブだね』と言う」で、子どもが嫌がる早期教育の強要、子どもの気持ちを無視した親の気持ち優先の行為が認められ、子どもに与える心理的影響がすぐには見えにくい行為なので、子どもへの不適切な関わりを認識しにくいと考えられた。包丁などの危険物が見える行為に対しては認識が高いが、親が子どもを威圧する行為に対しては子どもへの不適切な関わりに対する認識が低いことは、危険の予測、子どもの苦痛のとらえ方の予測に対しての認識が低いことを示していると思われる。性的虐待では「親が思春期の子どもと一緒に風呂に入る」「親が性交の様子等も含めて自分の異性体験について子どもに話す」「親が自分の好みで娘に露出度の高い服を着せる」で、親の好みを子どもに押しつけることは、「親の考え方であるので他人が判断することはできない」という意識を反映しているものと思われる。

以上子どもへの不適切な関わりに対して保健師は、1)虐待の種類に関わらず、明らかに生命や外傷に関わる行為は子どもへの不適切な関わりであると認識しており、2)明らかな現象がない行為については認識がしにくい、3)しつけ、親の教育の一環、親子関係づくりに関する行為は、子どもへの不適切な行為として判断するのか、親の考え方や教育方針に対して他人が判断できない、とするのかの迷いが子どもへの不適切な関わりの認識をあいまいにしていると思われる。このことから、子どものウェルビーイングの促進、啓発を考える上で、また、問題の重度化、深刻化を防いでいく上で、たとえあざや骨折が生じていなくても殴られたり、蹴られたりすることは不適切なものであることを明らかにすることが必要であり(高橋, 庄司, 中谷, 山本, 奥山, 加部, 加藤, 才

村, & 北村, 1996) 保健師は「明らかに問題が生じている」レベルではなく、「明らかに危険が予測されたり、子どもが苦痛を受けたり」している時点、すなわち現象としては現れていないレベルで子どもへの不適切な関わりの認識を高めることが必要である。また、小林(1994)が子どもの側にとって有害な行為であれば虐待なのであり、我々がその行為を親の意図で判断するのではなく、子どもにとって有害かどうかで判断するように視点を変えなければならないと述べているとおり、保健師が子どもへの不適切な関わりについて判断する際に親の立場に立って判断するのではなく、子どもの立場にたって判断することが必要である。この為には子ども人権擁護の認識を深めることが重要である。

子どもへの不適切な関わりに対する連絡・通告の認識

子どもへの不適切な関わりに対する認識が高い項目は、専門機関への連絡・通告の認識も高い項目である。しかし、本調査結果では子どもへの不適切な関わりであるという認識が高くても必ずしも専門機関への連絡・通告の必要性に対する認識は高くなかった。高橋ら(1994)は「虐待や放任の行為への判断に比べ通告の必要性が低下する理由として、「しつけ」行為に関して通告することの抵抗感や迷いがあるのではないかと報告している。今回の調査対象の保健師の中にはしつけ行為を通告することには迷いがあるとした者もあり、子どもへの不適切な関わりの行為をしつけと判断していると考えられる。性的行為については、子どもの心理的外傷の危険が予測されるが連絡や通告までする必要はない、または連絡・通告しても改善につながらないと判断していると考えられる。通告に関しては親の承諾よりも子どもの保護が優先されること、児童相談所が援助に関して協力を得られる機関であるという認識を看護職者間に定着させていく必要がある(澤田, 1999)。また、児童虐待の防止等に関する法律(厚生省, 2001)第5条では保健師を含む専門職は児童虐待の早期発見に努めなければならないとし、専門職、一般人、問わず虐待を発見した者は速やかに通告するとなっ

ている。今回の調査は何故連絡・通告をする必要がないと考えたのかについては把握していないので、今後の研究の課題である。

結 論

保健師を対象に「子どもへの不適切な関わり」に対する認識、「子どもへの不適切な関わりに対する連絡・通告」に対する認識についてビネット調査を実施し、保健師の子どもへの不適切な関わりに対する認識の実態と支援の課題を明らかにし、以下の結論を得た。

本調査の対象となった保健師たちは、1)生命の危険や児への心的影響が明らかな場合、「子どもへの不適切な関わり」という認識が高く、2)児の心身への影響が表面に表れない行為については「子どもへの不適切な関わり」という認識が低い。また、3)その行為が「子どもへの不適切な関わり」であるかどうか判断する場合には親の立場を優先し、子どもの立場には立っていない。そして、4)子どもへの不適切な関わりに対する連絡・通告」に関しては、その行為を「しつけ」と判断した場合には通告することに抵抗感や迷いがあり、「子どもへの不適切な関わり」であるという認識があっても連絡・通告しないこともある、ということが明らかになった。今後、「子どもへの不適切な関わり」と「しつけ」の違いを明確にし、子どもの安全と安楽を最優先して判断するなど、子どもへの不適切なかわりをアセスメントする能力を向上させ、子どもへの不適切な関わりの行為を早期に発見し援助していくシステムの構築が保健師に課せられた今後の課題であると思われる。

謝 辞

本研究に賛同し協力くださった保健師の皆様、ビネット調査票を快く開示くださった日本社会事業大学高橋重宏教授に心より感謝致します。なお、本研究は平成13年度大同生命厚生事業団の地域保健福祉研究助成を受けて行ったものの一部である。

文 献

- 喜多明人.(2000).子どもの権利条約の10年と制度改革 地域における子どもの権利保障のために .
世界の児童と母性 ,48(4),10-13 .
- 小林美智子.(1994).児童虐待とその対応について .
子どもなんて大きらい: 被虐待児への援助(報告書 Part4).せせらぎ出版 ,pp.10-15 .
- 厚生省.(2001).子ども虐待対応の手引き .有斐閣 .
- 坂井聖二.(1998).子ども虐待のスペクトルとメカニズム .保健婦雑誌 ,54(8),614 .
- 佐藤拓代.(2002).子ども虐待予防のための保健師活動マニュアル .平成13年度厚生科学研究補助事業 .地域保健における子ども虐待の予防・早期発見・援助に係る研究報告書 .pp.1-8 .
- 澤田いずみ.(1999).児童虐待における病棟看護婦(士)の遭遇状況と通告に関する認識調査 .子どもの虐待とネグレクト ,1(1),35-40 .
- 高橋重宏 ,庄司順一 ,千賀悠子 ,須永 進 ,益満孝一 ,加藤 純 ,木村真理子 ,& 栃尾 勲.(1994).子どもへの虐待に関する社会的インターベーションのあり方(1).日本総合愛育研究紀要 ,31 .p.79-89 .
- 高橋重宏 ,庄司順一 ,中谷茂一 ,澁谷昌史 ,栃尾 勲 ,& 北村定義.(1995).子どもへの不適切な関わり(マルトリートメント)のアセスメント基準とその社会的対応に関する研究(2).日本総合愛育研究紀要 ,32 ,87-106 .
- 高橋重宏 ,庄司順一 ,中谷茂一 ,山本真実 ,奥山真紀子 ,加部一彦 ,加藤 純 ,才村純 ,& 北村定義(1996).子どもへの不適切なかかわり(マルトリートメント)のアセスメント基準とその社会的対応に関する研究(3).日本総合愛育研究紀要 ,33 ,127-141 .
- 高橋重宏 ,石森真基子 ,岩田泰子 ,影山秀人 ,加藤芳明 ,悴田直樹 ,木原純子 ,小林秀次 ,平嶺一昭 ,& 山屋春恵.(2000).子どもの人権擁護: 神奈川県の新しい取り組み .中央法規出版 .
- 松井一郎 & 谷村雅子.(1999).子どもの虐待とは何か .保健の科学 ,41(8),564-570 .